

『砂の器』

1974年／日本／野村芳太郎監督作品

懸命に生きても過去から逃れられない 人間の「宿命」

会員 國部 徹 (44期)

「砂の器」
デジタルリマスター2005
DVD発売中
期間限定価格 2,800円(税込)
発売・販売元：松竹株式会社
映像商品部



松本清張の原作を映画化したもので、公開されたのは1970年代だと思う。数年前にテレビでドラマとして放映されたことがあるが、キャストも若く、事件のキーになる背景事情の設定も今風にアレンジされていた。私が印象に残っているのは、やはり30年以上前の映画の方である。

ストーリーの本筋は殺人事件の捜査であり、ベテランと若手の刑事がコンビを組んで犯人を追いかけていく、という話である。殺人現場で被害者と容疑者の会話に出てきていた「カメダ」という一言しか手掛かりがない中で、刑事たちが細い糸をたぐり寄せるように真相に迫っていく。とにかく現地に出向く、というのが一貫したスタイルで、小さな手掛かりに食らいついていく過程は、推理ものとしてもなかなか良くできていると思う。

この映画には「悪役」がない。殺人事件であるから当然殺人犯人がいる。その動機は自己中心的で、被害者を遺棄するなど態様も悪質で、犯行後に逃亡し情婦に指示して証拠隠滅を図るなど事件後の態度も悪く、

被害者は幼少時の恩人で何一つ落ち度がない等…、犯人を責めること自体は難しくない。しかし、犯人には絶対に隠さなければならない過去があった。それは親が「癩病」（ハンセン病）患者だという事実であった。犯人は、その過去を消すために、他人の戸籍に潜り込んで素性を隠し、懸命に生きてきた。そして、芸術家としてやっと名声をつかみかけたそのときに、その過去を知る人物が眼前に現れてしまったのである。

それでも犯人は、我が身に捜査が迫り来ることを悟り、結局人間は過去から逃れられないという思いを込めた「宿命」という作品を残して、過去に戻っていくのである。理不尽といえば理不尽だが、実はその「過去」の少年時代だけが生涯で唯一、人と愛情を交わし合った時間だった、というのが救いである。

30年以上前の映画なので、出てくる俳優も一昔前の人たちがほとんどである。「情婦」という言葉も死語になってしまったようで、ワープロの変換では出て来なかった。今度は新しい映画に挑戦してみようと思っている。